エコハウス研究会季刊紙

そらどま

2023年
秋号
第15号

2023.AUTUMN vol.15

CONTENT

対比される異空間洋と和
丸谷博男（代表理事）

第１０回全国大会開催のお知らせ
正会員数の推移

表紙
草薙の住宅
永田章人（静岡県静岡市）

SORADOMA

対比される異空間　洋と和

「洋と和」という二分される建築と室内空間。
事の始まりは、「数寄屋再発見！」という私の建築人生にとっては衝撃的なこの 2 年間における浮輪寮の取り組みでした。また、今年の 9 月で 75 歳を迎えました一建築家でもあります。数えれば建築の設計に取り組み始めてから 50 年の節目となります。日本建築を学ぶ時に寝殿造、武家造、書院造、そして数寄屋造、さらに和洋折衷造、そのあとはインターナショナル建築に大きく影響され、太平洋戦争後は、アメリカナイズされた生活観・住宅観が普及され、その後は西洋の歴史的変遷やさまざまな建築観を学び、自他ともに今日に至っています。

「裸の建築」という姿からは、西欧、あるいは南米、中近東、北アフリカで見られる「組積造」があります。壁を組積造、屋根は木造という原始建築からバシリカ建築までの愛らしい素朴な建築様式から、アーチ・ヴォールトによるゴシック以後の建築様式が理解されます。それに対して、法隆寺、東大寺。唐招提寺という一連の軸組木構造による大空間があります。結果は「マッシブなヴォリウムを持つもの」と「重さを持たない線材の構成による空の間」という大きな違いがあります。

人間の暮らしには、「守り」と「プライバシー」のための間仕切りと建具が必要となり、組積造建築では、壁に穴を開け、それが崩れないように上部に荷受け水平梁が必要となります。この方法とは大きく異なるのが軸組木構造です。軸組で大きく開口された部分には、壁を入れることも建具を入れることも可能です。嵌め込むパネルには無垢板、格子組パネル、襖、紙張障子など固定壁とすることも、脱着可能な壁とすることも、稼働建具とすることも可能なのです。まさに変幻自在、融通無碍なのです。限定と非限定など様々な文化の違いを作り出す素でもあるのです。

さらに、建築を取り囲む外部空間との関係も、同じように、変幻自在、融通無碍となり、外部と建築との境が無限定なのです。それだけに人々の空間意識が多様であり、繊細でもあるのです。

さて、こうした背景を念頭に入れておきながら内部空間へと進むこととします。

洋と和の美意識・文化の違い

はじめに、洋と和の相違点について思いつくままに列挙してみましょう。

□構造

洋は、石、焼成煉瓦、日干し煉瓦、木（校倉造、軸組造）。
和は、木造軸組造、校倉蔵（蒸籠造）、蔵などで板倉（落とし）、組積石造。

□外部開口部（ガラス窓）

洋は、開き窓・扉、上げ下げ窓、一部に引き戸がある。
和は、引き違い戸、方引き戸、古いものでは蔀戸、突き上げ戸。

□外部開口部（防護窓）

洋は、シャッター、外開き鎧戸。
和は、雨戸。

□内部建具

洋は、基本が開扉、親子開扉、たまに引分け戸。
和は、種別では、板戸、襖、障子があり、基本は引戸。開扉も珍しくない。引戸は 3 尺幅が基本で幅により〇〇枚引戸となる。

□間仕切壁

洋は、基本的に音が漏れるのは個室間仕切りとはならない。ただし、トイレではできるだけ開放的にして防犯を重視する。
和は、襖でも宿の個室間仕切りの役をしていた歴史がある。開けられるのに開けてはならない戸、聞こえるのに聞いてはならない音、それが社会で共有していたエチケットでした。

□造付け家具

洋は、必要最小限とし、置家具に力を入れている。枠周りや、ボーダー、天井格子などに装飾を多く用いる。その装飾に時代的な様式を表現している。
洋の室礼として、特徴的なのは暖房設備である暖炉周りの造作を、レセプション・客室などで豪華に扱うことであり、家族室においてもとてもヒューマンなコミュニケーションの場として表現している。
和は、床の間周りに造付けの室礼が施される。床の間、書院、違棚などに定型があり、多様に展開されていく。時代的な表現というよりは、真行草という普遍的な表現概念を持っている。
古民家では、洋の暖炉とは異なり暖房設備である囲炉裏が家族の中心となり、客間には囲炉裏は設備しない。囲炉裏は食事空間ともなる場であり、あくまでも晴れの場ではなく褻の空間の室礼として理解されている。近代住宅では、玄関と靴箱が定式化されて来た。また、火と水の設備が向上し。オープンキッチンが可能となり、褻の場から晴れの場へと登場したことは、ある種の大革命であった。客間がなくなり、LDK にキッチンを伴った展開は、設備機器が常設的な家具としての室礼を備えられるようになったという経過を物語っている。

□収納庫・納戸・押入れ

『障子・襖・板戸をはずせば広間になる開放的な日本のすまいにも閉鎖的な部屋があった。12 世紀頃から発達したもので入口だけが戸で回りは板壁や土壁で囲い、寝室とした。これは書院の座敷飾りのひとつである帳台構えに通じる。また武家屋敷でも回りを土で塗り籠めた安全な部屋が求められた。そこは着物や家財をしまう所でもあった。家財が多いと蔵をつくった。一般の人のすまいではこのような部屋を納戸といった。西日本では一家の戸主が寝る部屋が納戸である。』民族学者宮本常一「日本人のすまい一生きる場のかたちとその変遷」（農文協 2007）
大名や将軍の屋敷・城では面会所の室礼は「帳台構」と言われている。帳台構えは本来納戸の構えを意味している。大名・将軍の納戸、つまり寝室が面会所にあり、それが大変豪華に作られている。また、その引戸は特に豪華絢爛に設らえられている。納戸である故、内部は漆喰で塗籠られている。
その納戸が、物入れとなり、押入れとなって現代に引き継がれている。最近ではベッドが寝具とされているが、畳床に布団という組合わせの伝統的な寝具は、今改めて健康ブームの中で見直されている。日本のような湿潤な気候の世界ではベッドの非衛生的な側面に心配が残る。

□常設的可動家具

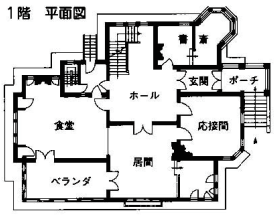
和の納戸、押入れの室礼は、とても素っ気ない。引き違い戸あるいは開扉程度となっている。これが洋服ダンスや和ダンスとなると、途端に様々な表現がなされる。岩谷堂箪笥、仙台箪笥、庄内箪笥、米沢箪笥、二本松箪笥、加茂桐箪笥、三国箪笥、春日部桐箪笥、江戸指物、京指物などそれぞれの産地特有の意匠が凝らされていた。箪笥は、和の空間における半可動家具の典型だったと言える。これに付属して、鏡台や火鉢、茶箪笥などが和の住宅に欠かせないものとなっていた。

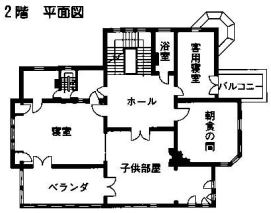
□**仮設的家具**

日本では平安朝の調度部に屏障具（屏風、几帳、壁代、御簾、御帳台）がありました。衝立は衝立障子の略で一枚ものであり，二枚以上を連結させたものが屏風でした。伝統的な書院建築では玄関の室礼が重視され、家の奥が見えないように置かれていたのが一枚建の衝立でした。格子や木彫、襖、襖絵、鏡板など多彩な表現がなされました。より家具的なもの、あるいは道具的なものとなると大変多様なものがありました。イラストでご紹介します。「新板かつて道具尽／かつて道具尽」（芳虎　安政 4(1857) 年）には江戸時代の生活用品が描かれています。

以上、洋と和の室礼の違い、多様性を列記しましたが、重要なことは、和の世界では極力「無駄」を省く、という基本が底辺にあり、飾ることは必要としない、まさに「清貧に甘んじる」という禅の思想に繋がる心があるように思います。その意味では、朝鮮半島の李王朝の世界が多くの日本人に共感を持って強い関心を寄せていると理解できます。また、北米のシェーカー教徒の世界も同じように通じるものがあります。さらに、広げると北欧の家具、インテリアの世界も余計な装飾を必要としない普遍的な造形哲学があり、日本人の共感を得ることができています。

さて、もう一方の和的ではない、洋的なもののあり方を簡単にまとめてみましょう。神戸の異人館街にある旧トーマス邸です。





この館はかつて神戸に住んでいたドイツ人貿易商ゴッドフリート・トーマス氏(Gottffried.Thomas)が自邸として建てた建物です。北野町・山本通地区に現存する洋風建築物の中で、煉瓦壁の建物としては唯一のもので、色鮮やかな煉瓦の色調、石積みの玄関ポーチ、2 階部分のハーフ・ティンバー（木骨構造）など、他の洋風建築物と異なった重厚な雰囲気をもっています。

旧トーマス住宅は、 1 階に玄関ホール、応接間、居間、食堂、書斎があり、2 階は夫妻の寝室、子供部屋、客用寝室、朝食の間などがあります。室内の意匠は部屋によって変えていますが全体にドイツの伝統様式を採り入れながら、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての新しい芸術運動（アール・ヌーヴォー）の手法を感じさせるものがあります。1 階各入口扉に付いている把手金具に、アール・ヌーヴォー風の装飾がつき、玄関ポーチの桂頭飾り、応接間のシャンデリア、書斎腰板の風刺画などにその傾向がうかがえます。また食堂は中世城館風の天井小梁、飾り戸棚、暖炉飾りなど見ごたえのある意匠をみせています。

昭和 58 年 (1983 年)12 月より昭和 60 年 (1985 年)3 月にかけて本格的な保存修理を行い、トーマス氏の娘カルボー夫人の記憶や、当時のアルバムを参考に復原できる所は可能な限り元の姿に戻しています。（以上、神戸市の資料から引用）

洋間のインテリアを構成する基本要素は次のようにまとめることができます。

- **天井のボーダー、壁のボーダーによる装飾**
- **壁の腰板**
- **壁の壁紙・壁布・左官壁**
- **ドアと枠周りの装飾**
- **床の寄木張り**
- **床の絨毯**
- **照明のシャンデリア**
- **窓の開閉方法と格子・組子のデザイン**
- **窓周りのカーテン・吊り具**
- **部屋の中心となる暖炉**
- **額絵**
- **置き家具**

などが列記できます。和と洋の室内装飾の大きな違いが理解できると思います。

和では、さらに生花や香炉など季節を表現する小物が他の装飾要素が少ないだけに、空間の中で大きな役割を果たしています。床の間や書院は、その多くの表現の場となります。

また、建具については全く異なる扱い方と役割があります。

今後さらに、これらを整理していきます。

10 年の足跡と行先

あっという間の10年でした。そして、10年にしてはもっとやれることがたくさんあったのではないかと心許無く思う気持ちも抱いています。それは、どれだけ日本の社会に影響できたかということです。あるいは、間違った道を歩んでいるかもしれない日本の人々に、より正しい道を示せなかったということでもあります。
私たちは、建築分野に特化して活動し議論し提案して来ました。今、日本人が気付き凝視し変革を図らなければならない事、真実を知り理解し実践しなければならない事、地球や宇宙的な秩序に倣うという事、などなど先駆者としての私たちが実践すべき道は明解に描かれています。強い意志と愛を持って次のステップへと進んでいきましょう。written by h.maruya

◯第10回全国大会開催のお知らせ

活動１０周年を記念して、今年の第１０回全国大会は盛大に開催いたしますので、11 月 30 日の総会には、正会員の皆さん全員参加でご予定ください。

◆宿谷先生の大講義
日時　2023 年 11 月 29 日（水）10：00 ～ 18：00
会場　日比谷図書文化館コンベンションホール
住所　東京都千代田区日比谷公園 1-4
地図　https://goo.gl/maps/4S9T9e9w1gCDAa969
定員　207 名

◆木造施設実践例の発表会
日時　2023 年 11 月 30 日（木）10：00 ～ 12：00
会場　日比谷図書文化館コンベンションホール
住所　東京都千代田区日比谷公園 1-4
地図　https://goo.gl/maps/4S9T9e9w1gCDAa969
定員　207 名

◆総会
日時　2023 年 11 月 30 日（木）13：00 ～ 18：00
会場　日比谷図書文化館コンベンションホール
住所　東京都千代田区日比谷公園 1-4
地図　https://goo.gl/maps/4S9T9e9w1gCDAa969
定員　207 名

◆懇親会
日時　2023 年 11 月 30 日（木）18：30 ～ 20：30
会場　松本楼
住所　東京都千代田区日比谷公園 1-2
地図　https://goo.gl/maps/T51avGTN4LuSkip88
定員　150 名

◯正会員数の推移

一般社団法人エコハウス研究会の正会員は現在 125 社です。
正会員の業種区分推移を集計しました。
100 社を超える規模の民間の建築団体は、日本に多くはありませんので、有意義な建築活動団体の規模となりました。

正会員業種区分推移

業種区分	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	計	比率	計	比率
工務店	11	6	5	1	6	0	29	24%	77	63%
設計事務所	23	14	6	3	2	1	48	39%		
メーカー	1	17	8	2	0	1	28	23%	28	23%
商社	1	1	0	1	0	0	3	2%	18	15%
施工店	1	3	1	1	2	0	8	7%		
その他	1	1	1	1	2	0	6	5%		
不動産	0	0	0	1	0	0	1	1%		
計	38	42	21	10	12	2	123	100%	123	100%
累計	38	80	101	111	123	125				

エコハウス研究会季刊紙
そらどま
2023.AUTUMN vol.15

本　部　東京都世田谷区代田 3-48-5 梅ヶ丘アートセンター
事務局　東京都国立市富士見台 2-12-32

代 表 理 事　丸谷 博男（株式会社エーアンドエー・セントラル代表取締役）
理　事　若原 一貴（日本大学芸術学部教授）
理事（事務局長）　磯貝 左千夫（株式会社ジェイボックス代表取締役）

幹　事
東北エリア　髙木 正基（高木電気管理事務所）
関東・沖縄エリア　菅原 律子（菅原律子設計事務所 +itiS）
関東エリア　萩原太介（株式会社ホームス空間創建）
静岡エリア　永田 章人（株式会社永田デザイン）
浜松エリア　大石　智（有限会社大石設計室）
関西エリア　上原 弘一郎（ウイズダムデザイン）
関西エリア　新堂 雄美（A.S.A.P. デザインラボ）

エコハウス研究会 会報 2023 年秋号（第 15 号）　2023 年 9 月 10 日発行